

## 研究経過報告（昭和63年後半～平成2年前半）

田 畑 治

この研究経過報告は、2年ぶりに行うことになった。1989年（平成元年）3月25日から1990年（平成2年）1月24日までの満10カ月間、文部省から派遣されて、アメリカ合衆国カリフォルニア州立のカリフォルニア大学ロサンゼルス校（University of California, Los Angeles；以下UCLA）に在外研究で出張したからである。研究テーマは『カウンセリング・心理療法に関する研究』であった。幸いに筆者が得たスポンサーは、S. スー教授で、同教授は、1988年9月にUCLAの心理学部の中に、「アジア人でアメリカに居住している人の精神保健に関する国立研究センター」（National Research Center on Asian-American Mental Health; NRCAAMH）を創設された人である。筆者は、その教授が所長を勤めるNRCAAMHの訪問研究員となった。そこを基点にした研究活動も含め、以下に過去2年間の経過を含めて報告することにする。

### 1. カウンセリング過程と精神保健の研究

このテーマ領域では、つぎのような公刊された論文および未刊の論文を得ることができた。事例報告として“境界例”の症例を行った（『心理臨床』（星和書店刊）特集・境界例の心理治療をめぐって、2巻2号、127-132頁、平成元年6月）。またロサンゼルスに到着し、英文に翻訳し、ガルデナ市のロサンゼルス郡精神保健局の「沿岸アジア太平洋精神保健サービス」で日系の池田ケイ子博士（臨床心理学者）を中心としたセミナーで、境界例のトリートメントをめぐって、つぎの2事例を発表し、討論を行った。“Treatment of Borderline Personality Disorders (I) —A Case of School Phobia, especially the Type of Puberty-Delusion in Japan—” (May 18, 1989), “Treatment of Borderline Personality Disorders (II) —A Case of Borderline Personality Disorder in Japan—”. (May 25, 1989). これらのレポートは日系のアメリカ人の中にも、近年“境界例”が増加しており、現地の専門家の人たちにも、強い関心が寄せられたし、日米の比較文化的差異、価値観の違いが浮き彫りにされた。なお後者の事例については、池田ケイ子博士からも事例のコメントを頂戴し、『名古屋大学心理教育相談室紀要』

第5巻、7—12頁（1990年3月刊）に、同一題（英文）で投稿した。これを契機に、筆者は“家庭内暴力”（アメリカでは、“Family Violence”とか“Domestic Violence”とか呼ばれ、もっと概念が広いが）の日米比較のための事例蒐集を試みようとしたが、事例提供をしてもらうことが意外に難しく、けっきょく滞在中に数事例しか蒐集できなかった。筆者自験の、日本での“家庭内暴力”の事例は、息子が母親に身体的攻撃を加えたものであるが、アメリカではこのような息子が母親への攻撃をする方向やタイプは、数えるほどしか見られなかった。アメリカ合衆国では、親が子どもへの虐待（abuse）や夫が妻への暴力は非常に多く頻発し、問題になっているということを見たり聞いたりした。UCLAでは実際の事例との取り組みをする機会にも恵まれ、8月から10月まで週2～3回のインテンシブな面接に立ち合うことができ、筆者は一回50分の面接のあと、次回（2～3日後）までに毎回英文レポートを作成し、集中的に傾倒をした（Yamamoto, J., & Tabata, O. 1989 A Case of Gender Identity Disorder—Adolescent Type. (Unpublished)). 筆者は、UCLAのNRCAAMHのチームリーダーの一人であるJ. ヤマモト教授にはその他に比較精神医学のミーティングにも招待を受け、仲間に加えてもらった。公私ともに大変お世話になった。同教授は、約10年前にアメリカ精神分析学会会長も務められ、多くの日本の精神医学者とよく通じておられる。先生の公私とも、私に対するケアは生涯忘れられない思い出となっている。

さて、肝心のNRCAAMHについては、別報（田畑, 1990, 「海外便り」『こころの健康』（愛知県精神保健協会）, 第4号、2—3頁）に概要を報告したのでそちらに譲るが、NRCAAMHで1度発表したものを手直しして、今夏7月に京都で開かれた第22回国際応用心理学会議において、UCLAのS. スー教授がオーガナイザーを務めたシンポジウム『異なる社会におけるアジア人が直面している精神保健の諸問題』で、日本の戦後の精神保健の発展をI～V期に分けて発表した（“Some Social Issues of Mental Health in Japan.” The 22nd International Congress of Applied Psychology. Kyoto, Japan. July 23, 1990). このシンポジ

ウムには、UCLA で一緒だった台湾や香港の女性研究者も出席し、再会を懐しむことができた。

また、UCLA に滞在中に指名のあった『心理療法の研究の最近の動向』（オーガナイザー：H. ストラップ教授）でも、同じく発表する機会に恵まれ、生まれて初めて一日に2本も英語で発表する貴重な体験をした（“Current Trends in Japan”, The 22nd International Congress of Applied Psychology, Kyoto, Japan, July 23, 1990）。そこでも、戦後の臨床心理学、とりわけカウンセリングや心理療法の研究が紆余曲折しつつ、特に1970年代後半からわが国では“事例研究運動”（村瀬，1985）というかたちで、個のユニークネスが徹底的に追究され今日に至っていることを述べた。これは、アメリカ合衆国の研究者には、奇異に映ったように思われた。ここでも、アメリカの著名な心理療法研究者、特にH. ストラップ教授に巡り会えたことは幸運であった。

カウンセリング援助の方法論に関しては、以下のような書物が分担執筆として公刊された。「カウンセリング」（本明寛・大村政男編『現代の心理臨床』応用心理学講座第10巻、Ⅲ部心理療法の理論と実際、14章、福村出版、126—142頁、平成元年6月）、「来談者中心療法」（上里一郎・飯田真・内山喜久雄・小林重雄・筒井末春監修『メンタルヘルス・ハンドブック』第Ⅵ部、第39章、同朋舎出版、534—548頁、平成元年2月）、「援助の理論と方法」（内山喜久雄・上里一郎編『新看護心理学』第12章、ナカニシヤ出版、157—172頁、平成元年2月）などである。近年、特に精神保健、看護の領域でも、人々に対するカウンセリングによる援助がますます切実なニーズになってきていることが伺える。

なお学会シンポジウムで発表したり、司会をしたものが2つある。「心理治療の場で何が起きているか？—クライアント中心療法の立場から—」（日本行動療法学会第16回大会発表、埼玉大学教育学部、平成2年9月）と「わが国のクライアント／パースン・センタード・アプローチおよび体験過程療法の現状と課題をめぐって」（日本心理臨床学会第9回大会自主シンポジウム、企画者・司会者伊藤義美氏と共同、平成2年9月）である。

なお辞典項目として「ヒューマン・エソロジー」「身上相談」「リード」（國分康孝編、『カウンセリング辞典、誠信書房、295、476、572頁、平成2年6月）があった。

## 2. 心理臨床家の養成、教育・訓練の問題

昭和63年3月に「日本臨床心理士資格認定協会」が発足し、認定業務を開始した。筆者は、その認定の登録番号第9号を取得した。これは、英訳すると“Certified

Clinical Psychologist”であり、アメリカの“License”ほど重みのあるものではないが、現在わが国の制度としては、一応最高の資格である。筆者がアメリカで、Ed. D. をもち、かつ Certified Clinical Psychologist であるという身分であったが故に、UCLA のNPI（精神医学研究所）で、クリニックにも立ち会わせてもらえたと思われる。また逆に事例との面接においてもその社会的責任・倫理規程などを自覚していたように思う。さらにまた日本人の代表としての自覚も伴ってである。今夏、この協会（筆者は監事を拝命している）は8月1日から文部省の許認可があり、文字通り「財団法人・日本臨床心理士資格認定協会」に昇格した。現在、協会に登録された資格取得者は、2,400余名である。これらの人は、“こころの専門家”として、重い社会的責任を自覚してクライアントの社会的福祉や“心の健康”の促進者にならなければならない。自らの心身の健康を保ちつつ、生涯学習というかたちで、研修を積んでいかななくてはならない。クライアントの社会的福祉に反するような行為をすると告訴され、罰せられる。自動車の免許のように、5年毎に更新されなければならず、一旦取得したからといって、安のんとしてはいけないう仕組みになっている。そのために絶えず相互研修を積んでいかなければならない。後輩を育てていく務めもある。そのようにして自らの技能も磨いていかななくてはならない。学会や事例報告のコメンター役も、このような意味において、重要な錬磨の機会になる。このたびは、在外研究期間もあり、その機会は少なかった。今回は、高石浩一氏による「ある心身症児との面接過程」へのコメントを行った（河合隼雄「事例に学ぶ心理療法6」『こころの科学』（日本評論社刊）、24号、102—106頁、1989（平成元年）3月および河合隼雄編『事例に学ぶ心理療法』日本評論社、61—68頁、平成2年9月）。また福田憲明氏による「子供の非行傾向を主訴に来談した母親との面接」（事—C—57）（日本心理臨床学会第9回大会発表論文集、東京大学・大正大学、226—227頁、平成2年9月）の指定討論を行った。大学院を修了し、力をつけて行きつつある臨床心理士（および志願者）は、頼もしい感じである。

なお、わが名古屋大学では、今春から大学院独立専攻「発達臨床学専攻」修士課程が発足した。これは、臨床心理士へのコースを目標の一つとしている。依頼されてであるが一文を執筆した（「臨床心理士」養成の現況—全国大学めぐり。8）名古屋大学。『こころの科学』33号 特別企画『臨床心理士—その養成と職能』46—47頁、平成2年9月）。

この他、「カウンセラー養成に果たすミニカウンセリ

ングの役割—養成方法上の問題点をめぐって— 1. 臨床分野でカウンセラー養成を行っている立場から」(日本カウンセリング学会第23回大会発表論文集(鹿児島女子大学, 40—41頁, 平成2年5月。および『カウンセリング研究』第24巻, 印刷中)を発題した。筆者は、アメリカで初めて、自動車の運転免許を取得したが、その貴重な体験を踏まえ、基礎練習の繰り返し、心理的集中、練習後の記録メモづくり、夢見など、カウンセリング訓練でも類比しうる点を発表した。カウンセリングも自動車運転も、心を集中していないと思わぬ事故を自分から起こしてしまうからである。そして他人にも危害を与えてしまうのである。これらの点を強調した。

### 3. 青年心理学, 学生相談, エンカウンター・グループ

この領域では、2つの公開された報告書と論文がある。1つは『昭和63年度厚生補導特別企画・自己発見のための合宿セミナー報告書—人間関係体験セミナー』の「I. グループ・プロセス(Bグループ・森田美弥子と共同)Ⅲ. ファシリテーターの感想文「新しいスタッフと共に、新たな体験を」, 15—19頁, 27—30頁, 名古屋大学学生相談室, 平成元年3月である。これをロサンゼルスで受けとり、それに触発されて、“エンカウンター・グループ”の発祥の地であるカリフォルニア州ラ・ホイアのCSP(Center for the Studies of Person)を1989年9月に訪れ、いまは亡き故C. R. ロジャース博士の生前のオフィスや記念図書館などをN. カンデル博士に案内してもらった。

また「UCLAにおける学生相談—Dr. Alan との対話を基にして—」(『名古屋大学学生相談室紀要』, 第1号, 31—40頁, 1989(平成元年)12月)を論文にした。アラン・ナガモト氏は、“Licensed Clinical Psychologist 第1号”として、UCLAの学生相談室に雇用された日系のカウンセラーである。日米の比較も行い、有意義であった。同氏には、これまたUCLA滞在中に色々お世話になった。氏は大の親日家でもある。

### 4. 教育臨床, 教育的人間関係の研究

「人間の博労・教師」(星野命編『性格心理学新講座

6 ケース研究—個性の型態と展開』のⅢ. 個性の実現をうながした個性, 第I章, 金子書房, 119—133頁, 平成元年11月)では、ある退職校長で大学の聴講生を志願してきた故橋本佑二氏との出会いやかかわりの過程を記し、氏の教育のめあて—“腰ぼね立てたよい姿勢”—を心身一如の統一化された姿として跡づけていった。

現代学校教育の病理である登校拒否に関し、「発達課題の達成状況と登校拒否」(『児童心理』特集 登校拒否の心理と指導, 6月号臨時増刊(第44巻8号)金子書房, 27—34頁, 平成2年6月)を論じた。登校拒否の子どもの、個々に内側から迫ることの意義、発達課題の達成状況を的確に査定し、内側から共に接近していくことの不可欠さを説いた。また「クラスに生かせるカウンセリングの諸方法」(『進路ジャーナル』7—8月号(No.346)—特集: 集団に生かすカウンセリング技術, 3—5頁, 平成2年7月)では、教師が学校教育場面いたるところで表現したり、伝えたりすることばや態度の中でも、特に教師自身の自己開示(self-disclosure)の重要性を説いた。これができるためには、教師自身の深い人生体験や人間観が基礎になっていくことが前提であると考えた。

なお、特定研究「教育場面における相互作用の総合的研究」の分担課題を荷っていたが、カウンセリングとフォーカシングの相互作用の分析をするつもりで、データをアメリカに持っていったが、文献入手が不十分であったり、データそのものが少量なこともあり、いまだに分析しえていないことを申しわけなく感じている。

### 5. その他の活動

①『『愛』が伝わる開き方・接し方』(特集:「子育て・しつけのポイント。上手な愛情のかけ方—親の接し方で子どもはのびる。PHP研究所『別冊PHP』6月号, 52—56頁, 平成2年6月)。グリム童話「白雪姫」の命名されるプロセスにみられるお妃の願いが『愛』の原点であり、出発点であることを述べ、人間関係(親-子関係)における親の側の態度条件の暖かさ、やわらかさを説いた。

(平成2年10月25日記)